

# 氷精の凍る話

金 銀

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

チルノが実は賢かったら？

という発想から産まれたのにどうしてこうなった。

# 目次

氷精の凍る話

1

チルノのその後といわゆる解説

9



# 氷精の凍る話

もし、もしもだ。

この世界があたしの敵だったら？

或いは、見えている景色が誰かの能力によつて造られたものだったら？

勿論、只の杞憂だ。だけど、否定出来る材料が無い。

悪魔の証明つてやつだ。『無い』は証明出来ない。

だから、あたしは馬鹿を演じる。

そういう敵意が向いてこないように。



なーんて、カッコ付けて見る。まあ実際、馬鹿を演じている訳だが。

馬鹿で元気で怖いもの知らずで無邪気で。

それらを求められているから仕方無い。

……誰に求められているんだ？

うん？

誰でもいいか。考えても思い付かない事は「分からない」と諦めた方が良い。神様だとか、画面の向こうの人だとか、そういうあたしに観測させてくれない輩だろうし。

んー。あたしの親友で無邪気の塊である大妖精が来ないな…。

一日一回は見ないと無邪気さを忘れちゃいそうで怖い。探しに行くか…。



氷のかまくらから出る。

うわ、湖の氷が少なくなってる。ヤバイヤバイ。

「冷符『瞬間冷凍ビーム』！」

うむ、これでよし。とりあえず向こう一週間は溶けないだろう。

妖精は自然の具現化。逆に言えば自然が無くなると妖精は消える。

普通、そんなことは滅多に起きないが：あたしは氷精。

氷は儂く溶けるもの。夏なんか特にだ。

だからあたしは生き続けるためにこの霧の湖の一部を凍りつかせる。

……なんか、巧く言えないが、『鶏が先か卵が先か』みたいになつてる。

氷から産まれたあたしが、生きるために氷を作る。

それは自然の物じゃ無いんだけどなあ。

それより、大妖精を探しに行くかな。



とはいえ、何処に居るんだろう？

考えてみたら大妖精の家が何処にあるか知らないや。

ま、大妖精が何時もやって来る方向に飛んでいけば何処かで出会えるだろう。

ええと、紅魔館が正面に来るように立つて：右から来てたね。あ、カエル。

手慰みにカエルを凍らせ、右向いて、飛びたつ。

と、何かにぶつかる。

「お、なんだなんだ？」

ぶつかるといふことはそこに何かがあるということ。即座にあたいっぽい発言をする。「そこに何かいるんだろ！出てこい！」

……あれえ？出てこないな。

取り合えず考えられる可能性。

一、天狗とぶつかつた。

二、サニーミルクの能力

三、ビックリするほど気のせい

「むう…サニーか？」

サニーミルク。『光の三月精』のリーダー格で光を屈折させる程度の能力を持っている。

何故だつたかあたしに敵対心を持っている。

「出てこい！そこに居るんだろ！」

わめいてみる。…んー、音が通るって事はルナチャイルドが居ないって事か。つまり、『光の三月精』では無い訳だ。

「むぐぐ…じゃあ天狗か！『しゅざい』は『アホインナー』を通してからにしろって言うてるでしょ！」



『アホインナー』ではなく『アポイントメント』だが。

ちゃんと教えてもらったんだから覚えてるよ。

周囲を見回す。…森の中にカメラレンズの反射光は見付からない。

耳を澄ます。…風切り音は聞こえない。

天狗でも無いのか？なら、気のせい？

…いや、確か体を霧状に出来る鬼が居たはず。ここは霧の湖だから霧にならたら手も足もでない。

「…鬼、か？」

ん、でも霧のまま攻撃出来たっけ？

と、後ろから声がある。

「残念！あたいだよ……！」

聞いたことのある声。いや、聞いたことのあるではない。常に聞いている声、だ。

恐る恐る後ろを振り向く。

そこには

あたしが

チルノが居た



「……ちゃん……ノちゃん！」

「ううん……？」

「あ、チルノちゃん起きた？」

「んむ……大ちゃん？」

「……って事は、あれは夢か。」

「もーチルノちゃんどうしたの？こんなところで寝て」

「こんなところ？」

「周りを見ると、霧の湖の沿岸だった。」

「……あれえ？」

「風邪引いちやう……ってチルノちゃんは風邪引かないか」

「む！それはあたいが馬鹿って事か！」

「え、ち、違うよ！チルノちゃん氷精だから」

「むうー。ならよし！」

ふう。やっぱり大妖精は可愛いし無邪気だ。

見てると安心する。

「そうそう、はいこれ。落ちてたよ」

「ん？」

大妖精が差し出してきたのは…四角くて…中心に『F』の文字が……

「大妖精だと思っただ？」

「あたいが、チルノだよ♪」

# チルノのその後といわゆる解説

「ふいふ、これでよし」

目の前にはでかい氷像。

「なかなか良いねー!」

「お、チルノじゃねーか」

振り向くと空から魔理沙が降りてきた。

「うわ、白黒だ」

「よう!なんかチルノっぽく無いな?」

「気のせいじゃない?その背中に背負ってる袋は何が入ってるの?」

「これはあれだ、パチュリーから借りた本が大量にだな」

「ふーん?でも、魔法の森から来たように見えたけど?」

「……なあ、緑髪のチルノ。その氷像の中に何か在るように見えるんだが、何だ?」

「……珍しい青い蛙だよ。…見せないからね!これはあたいのもんだ!」

「へいへい」

「かくいう魔理沙もなんか服が紫色だよな?」

「まあな。そういう気分なんだぜ」

「ふーん」

この魔理沙、もしかしくなくても。

「ま、私は用事があるし、じゃあな！」

バビュンと何処かへ飛んでいく魔理沙。

あの袋、中身が動いてた気がする。ま、良いか。関係ないし。  
と、見慣れた緑の影

「あ、大ちゃん！おーい！」

「あ、チルノちゃん！」

大ちゃんが降りてくる。

「大ちゃん！今日は何して遊ぶ？」

「えつとねえ。……？貴女、誰？」

「え？何言ってるのさ、あたいはチルノだよ」

「違う、貴女はチルノちゃんじゃない！チルノちゃんは何処なの!？」

「だ、大ちゃん……」

大ちゃんが周りを見回し、氷像を見つける。

「氷像……中にチルノちゃんが!？」

「あたいは、凍って無い、よ？」

大ちゃんがキツとあたしを睨む。

「速くこの氷を溶かしなさい！チルノちゃんの偽者！」

「っ！」

そう、あたしは『偽者』。自分で分かってる。

『チルノ』の髪は緑色じゃない。

『チルノ』の服は黄色くない。

だけど、あたしはチルノでいたい。

だから『本物』のチルノを倒した。

なのに、なのに！

「速くしなさい！」

「……のに……」

「え？」

「信じてたのに……！」

「な、何を」

「大ちゃんならあたしを認めてくれるって信じてたのに！『偽者』でもチルノとして見て





「なら良いわ。無いと思うけど、あんたも偽者には気を付けなさいよ？今回はそういう異変みたいだし」

「分かりました。……服、変えたんですか？青いですけど」

「ん、そういう気分だからね。『あんた、誰？』『私は博麗 霊夢よ』ってね」

~~~~~

「総領嬢様、これどうするんですか？」

「どうか本当に総領嬢様のせいですか、これ？」

「そうよ。衣玖が二人なもの」「私が増えてるのも」「全部私のせい」

「ちよつと、あんたは偽物でしょうが」

「そうだけど似たようなもんじゃない」

「…治るんですか、これ」

「治らないと面倒な事になりそうなんです」

「ああ、それなら大丈夫」「ちよつと漏れた気質が暴走してるだけだし」「明日には元通り」

「下界ではそれぞれに理由を付けて勝手に勝手に納得するでしょ」「自律人形だったり分身だったり残像だったりね」

「それなら良いんですが」